

南のひと 22

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



米盛絵利奈さんとは、石垣島の白保集落の中にある小さなカフェで出会った。

「いつか撮影させてね」と声をかけていたものの、彼女を白保集落のどこで写したら良いかが思い浮かばず、撮影への一歩が踏み出せずにいた。

しばらく経ったころ、絵利奈さんは大浜から白保へ嫁いで来たことを知った。

彼女の両親と兄は“まるべ”という居酒屋を大浜で営んでいる。今年の初めに、絵利奈さんと一緒に“まるべ”で集う機会があり、初めてお店をおとずれた。

店内に入った途端、「なるほど。絵利奈さんは、ここで撮影しよう」と一瞬で決まった。そこには、彼女がなぜ彼女なのかの答えが詰まっているように感じた。

“まるべ”を一言で表すなら、「ちょうど良い感じのお店」だろうか。壁と天井には大浜まるべ海岸沖で釣れた魚の魚拓や、手作りの凧、獅子のかしら、地元バンドのコンサートポスターなどが飾られている。お店の広さ、照明の明るさ、お客さん同士の間合い、店内装飾にいたるまで、無理が無くちょうど良い感じなのだ。

その後、日を改めて昼間の“まるべ”で、絵利奈さんと向き合った。

絵利奈さんは、“まるべ”を「居場所」とか「もう一つの実家」という言葉で表した。

「お客さん同士の結びつきや、偶然の出会いから織り成される人同士の縁を、ひしひしと感じられるこのお店がとっても大好き」と話す絵利奈さんは、お祭りや結婚式などの司会のお仕事も行っている。お客さんを迎える側の人々がどんな気持ちなのか、何を望んでいるのかを、会話をしながら感じ取り、喋る言葉を選んで行くそう。会場のお客さんが絵利奈さんの言葉を聞く時にどうしたら心地よいかをいつも考えていると言う。

「私は難しい言葉は使わないんです。誰が聞いても優しく、でもしっかりと伝わる言葉を常に探しています。人が望んでいる事にどうしたら上手く答えられるかばかりを考えているので、私って“自分”が無いんですよ」と真顔で話す絵利奈さんに思わずずっと吹き出してしまった。そこには、絵利奈さんという“自分”がにじみでていたから。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

「南のひと」5月号本文、上から3段2行目、誤った数字を掲載してしまいました。（誤）上3人の姉（正）上2人の姉
お詫びして訂正いたします。校正方法を見直し、工夫することでミスを減らす努力をしていきます。（やいま編集部）